【勤務参考】47　　１５．１０．１６

技術開発官（船舶）

「軍艦行進曲」（その２）

（読売新聞日曜版；浅見恭弘氏著述から）

ＣＤを聴いて、これほど驚いたのも珍しい。

１９９８年に出た、ＣＤアルバム「軍艦マーチのすべて」（キングレコード）。新旧様々な『軍艦行進曲』が収録されており、歌詞違いの『岩手県立盛岡第一高等学校校歌』など、珍品揃いのなかで、とりわけ興味深いのが、ミャンマー軍楽隊演奏による『ミャンマー・ドゥーイェ・タッマドウ（ミャンマー国軍）』だ。

ひずんだ音のブラスの前奏に続き、男達が歌う。耳慣れない言葉の響きは、勇壮というよりは、むしろ柔和。全然印象が変わってしまったが、原曲が『軍艦マーチ』なのは、だれにもわかる。

『軍艦マーチ』の来歴などを多角的に検証した「行進曲『軍艦』百年の航跡」の著者で、ＣＤ制作にもかかわった谷村政次郎（６３）（元海上自衛隊東京音楽隊長）は、都内での国際観光イベント会場で仕事中のミャンマーの若者らに、『軍艦』のメロディーを歌って見せたことがある。全員知っていて、「アーミー・ソング」だとの答が返ってきた。現地では、毎朝軍のラジオ放送で流れる。歌詞は、「一生懸命勉強して、ミャンマーを世界一に」・・・・といった激励的内容。残念ながら曲がどうやって伝わり、定着したかが不明だ。

「戦時中、タイにはこの曲の楽譜があった。ミャンマーにも当時の楽譜が伝わったかもしれない」と谷村氏は推測する。『軍艦』は韓国では反日歌となったといわれ、日本の軍歌が中国の軍歌になった例もある。軍歌も予想外の形で海外進出を果たしているのである。

曲の影に隠れて目立たないが、歌詞にはユニークな特徴がある。

当時の唱歌や軍歌は、七五調の詞が多かった。これに対し、『軍艦』は八五・七五が交互に繰り返す珍しい形式となっている。

紀州の田辺藩士だった鳥山啓は開明的な人物で、英語、漢学、生物学、地理学などに優れていた。少年時代の南方熊楠に博物学の手ほどきをし、動植物学の原書を貸し与えた。博学多才、熊楠の先駆的存在でもあり、向こう気の強い熊楠が、心から敬服する恩師であった。

後年上京すると、華族女学校の教授となった。女子中学生を連れて、よく植物観察に出かけたといわれている。その後は『軍艦』の武ばったイメージからほど遠い。

この曲を語るとき、国内では何かと「世界の名曲」という枕言葉が付いて回る。米国の『星条旗よ永遠なれ』（スーザ作曲）、ドイツの『旧友』（タイケ作曲）と並ぶ、「世界三大行進曲」と呼ばれてきた。

「曲自体はむしろシンプルで、技巧を凝らしているわけではないが、日本人の心の琴線に触れるものがあって、百年たっても生き残っている。名曲の最たるものです。」

そう高く評価する谷村氏も、「世界の名曲」と簡単に言い切る“日本の常識”には疑問を呈する。内外での演奏経験から、それほど世界中に浸透していないことを、よく知って

いるからだ。
　外国人に演奏して聴かせると、「すごくいい」という人もいれば、鼻も引っかけない人もいる。『星条旗よ永遠なれ』や『旧友』のように、外国の一流の軍楽隊や吹奏楽団が楽譜を持っていて、コンサートのプログラムに載り、頻繁に録音され、世界の音楽ファンが題名を聞いただけでメロディーを思い浮かべる・・・、とまでは行っていない。
　「『世界の名曲』というという言葉が付いて回るのは、『軍艦』だけで、『荒城の月』も『さくら』もそう呼ばない。何より『日本の名曲』なのです。」
　世界の誇るに足る「日本の名曲」というのが現状だろう

　守るも攻めるもくろがねの
　浮かべる城ぞたのみなる
　浮かべる其の城日の本の
　皇国（みくに）の四方（よも）を守るべし
　まがねの其のふね日の本の
　仇なす国をせめよかし

　石炭（いわき）の煙はわだつみの
　龍かとばかり靡（なび）くなり
　たま打つ響きはいかづちの
　声かとばかりどよむなり
　萬里（ばんり）の波濤（はとう）を乗り越えて
　御国（みくに）の光かがやかせ

完